

このコラムでは、発足以来 50 年以上の歴史をもつ津高東京同窓会の沿革を紹介しています。ここで記述している内容は、津高同窓会本部が毎年発行している『津高同窓会報』の記事に拠っています。『津高同窓会報』は 1964 年以降毎年発行されており、津高東京同窓会も含めた津高の同窓会活動の歴史を知ることのできる大変貴重な史料であるといつてよいでしょう。

前半「津高東京同窓会の今と昔」では、津高東京同窓会の発足から現在までの歩みを簡単に辿っていきます。後半「資料編」では、前半の内容に登場した話題を中心に、『同窓会報』にみられる津高東京同窓会にまつわる記述を、一部抜粋していくつか紹介します。

津高東京同窓会の今と昔（1963~2017）

陳川・三重桜・津高の同窓会を統合するかたちで「津高東京同窓会」が発足したのは、高度経済成長期の真ただ中、東京オリンピック開催の前年にあたる 1963（昭和 38）年の 9 月でした。戦後日本において、東京という都市がどんどんその存在感を増していた時代です。第 1 回総会は尾崎記念館、第 2 回は市町村会館、第 3 回はホテルニューオータニで開催され、津高東京同窓会は発足直後から発展目覚ましかったといえます。この東京同窓会の発足を皮切りに、大阪、京都、名古屋といった各地の大都市でも津高の同窓会団体の設立の動きが進みました。

この当時、津高東京同窓会は総会の開催を通じた在京の同窓生のあいだの親睦のみならず、在京の先輩から後輩への支援を媒介する役割を果たすという別の顔も持っていました。その代表例が、上京受験生向けの宿泊先斡旋事業です。当時、これを利用した津高の上京受験生は非常に助かったことでしょう。当時の『同窓会報』にも、津高東京同窓会による上京受験生への宿泊先斡旋に対する謝辞が数年間にわたって掲載されています。

ところが、故郷を離れた土地、それも東京という日本随一の大都市において、同窓生同士の結び合いの場を大規模なままに維持するのはそう簡単ではありません。津高東京同窓会にも、厳しい時代はあったのです。1970 年代には総会の開催規模が伸び悩み、団体の勢いにやや翳りが見えていました。1973（昭和 48）年発行の『同窓会報』10 号には、「津高東京同窓会に想ふこと」と題した記事が掲載され、当時の津高東京同窓会の厳しい状況が綴られたこともありました。1980 年代に入ると、当時の会長の逝去も重なり、津高東京同窓会は休眠期間に入ります。

しかし、各世代、各界で活躍する同窓生が多数居住している東京ならびに周辺の関東地域の同窓生が出会い、交流する場が存在することの重要性は、決して小さいものではありませんでした。1990年には津高が創立110周年という節目の年を控えていたこともあり、津高同窓会本部からは津高東京同窓会の活動再開を望む声が出ていたのです。1988（昭和63）年発行の『同窓会報』26号には、同窓会本部の事務局からのメッセージとしてその旨が掲載されました。

これを受けるかたちで1990（平成2）年に活動を再開したのが、現在まで続く津高東京同窓会です。復活初回の総会は、100名近い学生を含む500名に上る出席者を集めて大規模に開催されました。当時の津高同窓会会長は1990年発行の『同窓会報』28号で、このように非常に大きな規模で活動を再開した津高東京同窓会を「マンモス同窓会」と評しています。このとき、新生津高東京同窓会のスタートにあたって会長に就任された加藤精一氏（陳川・昭和22年卒）が大変尽力されたことは、多くの同窓生に知られ、語り継がれているとおります。ちなみに復活初期の総会では、当時非常に多かった学生出席者に向けた就職案内企画が盛り込まれたこともありました。休眠前の時代、特に初期津高東京同窓会が学生の支援を視野に入れていた時代の残り香でしょうか。

1990年代、2000年代と時代は移り、津高東京同窓会は関東地区の同窓生たちの親睦の場としての性格を一層強めていきます。とりわけ顕著なのが、世代横断的な交流を重視する運営スタイルであるといつてよいでしょう。2004年以降、津高東京同窓会の総会では歓談中の「席替え」が恒例のプログラムとして盛り込まれ、世代を越えた同窓生同士の交流を促進する空間が毎回作られています。もはやかつてのようには同窓会団体が直接同窓生同士の支援の媒介を担わなくなった今日においても、津高東京同窓会が年に1度大規模に作り出す世代横断的な交流の空間は、東京という場所において津高同窓生が先輩から後輩へと知恵や経験を語り、共有する興味深い機会になりえます。そして同時に、いつの時代も変わらず、同窓生たちの懐旧の場として、心の拠り所となっているのです。

資料編

・1969（昭和44）年掲載の謝辞「受験生に宿舎提供」

東京同窓会からは今年も受験生の上京中の宿泊について真心こもる宿舎提供の先輩たちを斡旋していただきました。計19件で、都内9件、横浜市内3件、国分寺調布小平都下近郊6件、千葉1件。お申し出による宿泊可能人員は26名にのぼります。JTBの旅館斡旋が数日前にありましたので多数の生徒がお願いすることにはならぬかも知れませんが、発表したらすぐ数人が問合せに来ましたので何人かはお世話になることと思います。毎年のあたたかいお心づくしに先輩の皆さまに心からお礼申し上げます。

・1973（昭和48）年の記事「津高東京同窓会に想ふこと」

昭和38年東京に一中・津中・三重桜・津高を合同した津高東京同窓会がうぶ声をあげて、早や今年は10年目、光陰矢の如しと言うが全くその感が強い。そして今初期の頃の写真を出して見て、今更乍ら己の齢に驚いている。

津高東京同窓会も年々本校からもご出席を願って年次総会を開催し、軌道に乗った安定感はあるが、初期の頃の100名を越す盛況に比し最近では7、80名とどうしても100名を突破出来ないマンネリ化した感がないでもない。特に若い世代の人達の出席が少ない事は残念である。ここ数年来如何にすれば出席者を多くすることが出来るかと事務局では種々頭をひねった挙句

- 一、第5回定期総会より在職の長かった恩師を1名ずつで招待した。
- 二、参加会費を若い世代が参加し易いようにと割引料金とした。
- 三、郷愁を呼ぶ赤福等の販売をした。
- 四、参加し易い土曜日の午後を選んだ。（今回は試みに土曜日の夜間に実施したが三重桜の参加が少なくやはり土曜日の午後がよいようだ）
- 五、会場の便のよさを考え昨年は東京駅ビル内のルビーホールを使用した。
- 六、文化放送の出前寄席をたのんだ。

等々の手を打って見たもののなかなか参加者が増加しない。各年次毎の同窓会の話を知ると、（私達、昭和18年卒も同様であるが）結構集まりはよいと聞く。各年次から1名ずつ出席して頂いても100名以上になる事を思うと残念でならない。そして年会費の自主的払込も少なく総会の参加者が少ない事は即年会費の減収に繋がり資金も次第にピンチを招きつつある現状である。

今後の課題は如何にして総会参加者を増やすか、如何にして年会費及資金の増加を計るかにかかっている。そして最後は会員の一人一人の自覚に待つしかない。名案がございましたら是非共事務局までご一報願いたいし、今年度の年次総会には一人でも多くのご参加をお願いいたします。

・1988（平成元）年の記事「同窓会結成のお願い」

今年も各地で津高同窓会がもたれたことはすでに報告いたしました。本部では、東京同窓会（木村氏の没後、休眠している）と名古屋同窓会を、110周年を機に復活できないものかと願っています。関東地区、中京地区には多数の同窓生がおられますので、ぜひ実現させたいと思います。

さらに九州にも新しく結成の動きが出てきています。よろしくご協力ください。

・1990（平成2）年・総会開催報告より、抜粋

2年前、陳川東京同窓会が設立されたのを機に、母校本部同窓会から再々津高東京同窓会の復活への声が高まり、昨年末、岡三証券社長加藤氏が同会長を内諾され、本年1月小生に事務局をやれとの業務命令を受けた次第である。以来、諸先輩のアドバイスを戴きながら、11月23日をターゲットとし約10か月間準備活動を続けてきた。

天皇即位の礼の翌週の復活同窓会当日の出席者は、我々の予想をはるかに上回る実に550名になり、110年の歴史を痛感した次第である。特筆されるのは、数え年101歳の野田大先輩がお元気な姿を見せていただいたことであろう。実に18歳から101歳までの伝統ある歴史と青春の復活同窓会であった。

・津高東京同窓会の復活に触れて、津高同窓会本部・社会長のコメント

（津高110周年）記念行事の成功もさることながら、私の最も嬉しいことは、110周年を契機として、九州支部の発足、10年振りの名古屋支部の再スタート、そして東京でも津高東京同窓会として、マンモス同窓会が誕生するなど、各支部が充実してきたことです。

文責：渡邊 大樹（平成23年卒）

作成日：2017（平成29）年1月22日